夫木和歌鈔 四 雜十六

契本校了
文化五十二九二

全三十六冊

837
36
4

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

清水濱臣藏書

曽山文庫

指南抄 秘書

兼作寺

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

837-4

夫木和歌抄巻第廿四

雜部十六

題

神祇 付社 釋教 付寺

根岸信韓氏寄贈

昭和八・七・三 寄贈

神祇

久安百首神祇の中　左京大夫顕輔

あらかぎのあらかれいてしむかり神をハ恐とあふきそめてき

とひつゝなしのきしをいさりせハ　同　あさのたゝやとなけきしを

前大納言隆季の

いふしへをまつまつなりハけころをまあけの衣代きるといひけり

社頭 社風　強倉大夫臣

ありまかりあけの玉かに神さひて　やゝかれかうすゝ社風を

四条神祇　同

やとよろのよろの神さちあるまわりたる海のたゝまきまくして

神祇哥　度會仲房

君の代はかきりもあらしたのもしやかりにもすめるみやかはの水

長哥　祭神　俊成卿女

あまくたるあらひとかみのみをしるやまのさかきの梅もしるへを
ゆふかけてつけて

家集　神祇哥　民部卿為家

やはらくるひかりもさらにあまてらすかみよのよろつよのはるやきとな
見ちおもへのすゑのしたにひくしめのはこそすゑもなかるらん

文永十年毎日一首哥

神かせのいすゝのかはのみなかみにかまくらねのあとをふくかせや

久安百首神祇哥　実清朝臣

ちりのよにまかりをいてぬみやとこにひとをたのみてまつしるしかな

家集　恵慶法師

年をへていはひそめける海はいかなれは神そしるらん
あまのうきはしみをまてもしらせむとよはけまかるの
この神

此哥ハ様々の説あり深き所にも

神の風すゝかのかはのなかれにて

まことにもあまくもすつるとうたえとあまくたらく

十題百首　前中納言定家卿

神のそのあか月ちかき月影のかけてまつらんみてくらのさと

三社奇事

同

[illegible]代はよきこのもりのことにて松とやらさひさらん

摂津住吉郡

永久四年百首 榊

後郡[illegible]

さらに[illegible]代榊のこむろとあらむまは[illegible]つけ[illegible]ねてるへ

[illegible]

[illegible]

かけてこゝろ榊のこむろのまうらさゝぬちきりとなしやらん

[illegible]百[illegible]奇合

[illegible]門内大臣

榊[illegible]やいけ[illegible]みとりのしめ[illegible]

三百六十首[illegible]中

[illegible]九条内大臣

榊[illegible]は[illegible]とも[illegible]とつくりとけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建長七年[illegible]

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

久安百首

前大納言[illegible]

榊さひていはへるわこのみゆるかとはよもの人のまもりか

[illegible]

前中納言[illegible]

[illegible]

[illegible]

西意又年三嶋社十首奇社以税

条後内和

万代もひさしくすけよ神のきや年まかりしぬ若ういもぬ代 セイ

永仁元年 誓忽首首 同

若ふ代をまもりとなるへよろつ神もなれて年をきこあし

西行三人

玉神祇

かしこまりしらくはなるこのかしこまりしかしこまれ

この命へそのうちよりなれなるなるひつり

世代のうれて後を加茂の社を祭りなるを

さしたかくなりて四国の方へ修行しなるよ

又まいらぬものもやとて仁安三年十月十日の

夜まいりて弊まいらすとてこなる代の社の祈

かくしこれに法施をまりなる程に木のなる此

月のかのくまて名よりも神さひ衰に光侍

なまとにとて

三嶋社をまもりなる神宗和下る奇藤

雅信正二弟

枕冊子

とまとうのさくへ美しきより雪ふれいとしまさしきかたれ ひさしさう

和名抄 山城乙訓郡 鞆岡 度毛 千賀

湊田 同

神巣 湊田

みれと田よ。そくひやつをり。どろちなや。どろちれや。やつなり。どろちれや。

見ると田のかりこの面も雪ふれは八よかさらて升りてゐる

神楽 葉
きりくすのはねのさう
かさやみその山のみま
ありきそのはねと
はかなくてあるさま
ちかけのとかれはやまま
きさ。

蜻蛉

みそのやまの木の間飛かふかけろふのほのかにしもとまのかけいの孫く

弘安元年百首　後九条内大臣

あきつはふ月日のかけろふのひかりみしよのさくらあかしある

久安百首　いさなき　実清朝臣

いさなきのみことのをかみもかそてをふりそそきしも云ひてし

いさなきを誤て
いさなきとかける
かけろふいさなき
とよみたるよし
蒼え神代上巻を
みるへし

建仁元年十首歌合　後鳥羽院御製

秋風やたつのうへのまさなかりかけをもてこさすさ河の影をそ

家集秋歌　西行上人

あはれにそみなこもれの歌の花は文河にりやまもすくしの

文治六年女御入内屏風

皇太后宮大夫俊成

人ことにをしむ桜の花なれやちるうゐのすかまとあはれわけ

百首歌　慈鎮和尚

秋ちかきえの枝のうへのかけろふのもとのいよまかかれは

家集秋歌　僧正行慶

秋ちかきみ空のとほくにみちかせいのりかたなりのまかきくらゆふ

家集秋歌　前陽門院大輔

いまはまたかけろふのかけのみそのうえの山もかゝる白雲

古今歌　従三位行能

すみのえの秋のまかせへかけろふのいさきゆきかへるまをしかも

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

同
家良朝臣

おとこ山ほのかけてこそあはれなれかみしもまよふあひの杜

新後拾神祇
同社哥合
八幡山神やまもりそもとのつゑひてさらゆくみちのさかへそ

同
いはりのよそてあらはる中の杜 いはりふ
恵慶法師

いはりふろすきあはぬよするかみまことにそてたのむひあれ

同集名所歌
後九条内大臣

ことわりてしあきらめおきさきの山神のこともりやもこの月

社頭を
正三位知家卿

寛喜
虹すみるゆきあひのかせそ家のかすをかゆさかせ神さひぬ

あをのや
光俊朝臣

見そらもりの絵それなりしあとのこやそのかそたふる神さひ ひらや

△次の十このうたは鹿島社云々の左註これ入へし

保延元年家成卿家哥合祝 いはやとの森
神祇伯顕仲卿

万代のつきをぬくすいはやとの神そかりてもをしとかへめ

春日社哥合 いくめの杜
卜部兼直

きこえつる代ゝのむかしをいまもなほたかはぬ神のしるしなりけり

家哥中 いはせの杜
順賢

あさ夕に代ゝのたのみをかけそむるいはせのもりのかみさひにけりや

建長八年百首歌合　みつの井　光俊朝臣

河内のみつの井のそこのいさゝかにてそいつも万代をよ

その月は神のしるしとみつらめ　くろゝの井　観誓法師母

しほたれん人はなきかはこゝにかよふ釣のすゝの神もなきすてゝ　こゝろやれ

久安百首神祇歌中　さゝらえひのゐ　左京大夫顕輔

かきみしにゆくゑもしらぬ神のいをのさきいつのさかへもすれ

日吉社五十首歌合　わつらひの井　法橋顕昭

いさゝかもこのぬまのしろうつもりしちひさすとおもふにまかせつゝひの井

此歌判者日吉記に作者法印尊海なるへし

よさのうみの頬神とるわかうるりやはちらかに　下

わくすとこそ

寛喜御神楽　あけいつちの井　後京極摂政

続拾神祇

あさくらやけいのちの神しあれはあさまりよかくおもの　こゝの井

家集神祇歌　すゝの　藤原長能

新拾神祇

此二行上文おとの哥の註と錯乱改へし

三わ山かすをしめたるさかきはのいのちしすをとこの井

このうたは鹿嶋の社にて読之よし社は大明神の井

のちもしめたるくもるすかしやとなく

濱松此哥ハ鹿嶋云々と云左註より次の神さかの哥の左註迄十二行上文みなくわりの次に入へしとも光俊の哥ハ長能の哥よをなす

かしま　常陸

神さふるかしまをみるいは海されのこともあれくりなそまくらの　うりなう

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

風神祇
題不知　賀茂遠久
久々のあまの忍舟
こきよせ　神代の浦
や今のこあれ野

秋の田をかりそのかりせよこきよせてこれをちとせをまつの
神祇部中
賀茂氏久
神ふにあさひ四つのこきよせて津なさそあしもまつ志
のこゝめ
六帖家志も月
正三位知家
家さゆるかりそのかりに詞なめて屋ゆきかりの山あゐの袖
三日社法朱印奇
慈鎮和尚
神かきやてかひの志らのなつけより志りぬひしけるのあさの衣
賀茂神主重保にとつりける十首奇一中
殷富門院大輔
志めのうちにつゝかりこゝ多人ゆゑ梅むあさつゝ

家集
みそらしてなかめまひぬるゆきもとに神のひかりつきさつる
二条大皇大后宮大夫
此奇ハ賀茂にこりりさるにゆきのいとしう
にんかそくてうちなるむる程に神の山おろし
とてつゝりてをいれさるによりめるとこそ
和家式ア
神ふのまさきのかつらうへそまつやひしてのかすハ
此奇ハ神祭日人こさてかしはのあるに成りて
奇りきてとせめられいらめるとこそ
大家集　かくこの神
能宣
此家式ア

新千逸一

あひうんとしかみのはまつらかとの神やそこしまちうん

郡用知 かと 河合の神 山城

為綱卿

その神代ありひそ出り河あひの神 波 まもれし 名寄 冬の夜の月

遠き七年郡物名家 五首 帝 神殿

よしの神 大和

源仲堂

たらちゝの親乃つくまつる三吉那ものよしかゝ神はんまゝ さらとし

五百歳帝合 五津鳥 紀伊

正三位季能石

なりめかんものゝまひ見れて月かけきしたまつ 八 あゆ

百首帝

敬義門院大僧

五津鳥ありぬ文井のこつりにはいくとしまつ 世て すくらん

社 よもけのうと

六帖 さもけ

春代さしみ我心しそみとぬつきさむけの神也いかゝ 左六 ちん

神原帝 新深 新津宮 さきのつ 海原 伊勢

菅木田延季

しらいとのさしすおちうるたきの原あとうれしやすていくよ つぬん

家集 よるこの神 和歌文 博士

偏頼朝臣

ぬりのかりへ 憑手飲兼可用 のしめ家 ゝのめこゝへ

しもあとはたるこのあけの さまりき

社 名 花代 さ白 すます こ

祝子 女賢

百代のかゝしもあらしは 今重様なるまたたこの玉のこつつき

岡君百首中

兼綱為和石

しつりあり今ちきりの末は世を繋の神のしるへ とこのむ 斗そ

根津豊嶋郡垂水神社 名神大月 次新算

仁安二年八月経盛卿家所合

荷原伴行

うけやらぬ人のなれはけうらうてむすまの神をうらこつ

正安三年日吉社 弄合 法印定為

たひえやいのりしるしを三幅の山かけをうらう秋のとすゑ

百首所 大原山城 前中納言定家卿

おりひのこゝろはけうしなきよとしへぬるまつことりる人神の

十部百首神祇 くまの 円

ちかきかなかちの山風いかなんみそまきしきなかき

建保四年 百首 鳥羽殿雅経卿

みく雨のくちしめのさしをかくふれはわかなにのうらうらの

千五百歳所合 くらのちの神 正三位季能卿

くらのちの神をうくめしいかなれはあさまさくらのさなりけん

くらのちの神 小侍従

やさきをうくまつみかこまいのりをきてちとせは君かうらうえ

一百首所 光明峯寺入座拝政

さくなるこやくまつみかこのまはしこかけていくとう月のきや

やさあひの神 伴勢 西行三人

世中をあめのうらけのうちにる世あらしあらしあらしてやとあ

此所は三位範使に出門内首宰相りして

遠江佐野郡

武蔵埼玉郡
前玉神社

よくうけくいなみこむろの神やつこいやとこ志ぬのりまろ うん

こむけ

同

なほ云 こむろ山と代つ女子の神さひて門のこゝろのさむけをそ すら

千五百歳命合 こゝろしの神 那美大后

こひとこと也津みまあ女代いのるかこれをいうけよみこしの神

家主宋女のりとに こゝりの神 右京大夫

ちりやかゝあさのいはくらしひらきまれなをうれみこりりの神

六百歳命合 新意 正三位経家

をろこ ひ にはまりなんたまりの神乃志しいありとこそ きけ

和漢図こゝけ山年納命 前大僧正隆弁

いかしへのよしのをうつほこゝけ山こうしのなかもさこそさくらめ

家主集 陰奥 為仲朝臣

ちりやかゝ神もねのひとなりへりやかゝりさかひくしきれら海の松

十郎百首神祇 加賀 前中納言定家

白山比賣神社

おもかけに なりふそさひうつりれぬ外 初ぐさよ冬の雪乃志ろ山

日吉社十五歳命合 ひよし 恒宗祖拝殿

新古神祇 大僧正慈圓

をろ人のねのひをこゝろのなかに風まんすましきしてのをとに

拾玉集一 神垣や

伝奴今日吉社會社乃冬 法二位家隆

匠材集といふもの 十のひ 足とも 指をいふとかゝり此 哥によりて思ひ誤 しる説も指を十のひ 足といふとも未尺 及

あかれとは さ代のひしつまを加ふへしれとしを冬のなかれすき ぬく

十禅師

同社乃命合社乃松風 前中納言定家

たのもしなとしもみつのかはにゆふかけて松の風こそひさしき

文永五年毎日一首中神祇

民部卿為家

いくちよのしるしなるらん日よしなる神のみゆきのかさしの松

かさしをのうへはかさすをみるへらは日こそ神のみゆきかさし（ありし）

ふたたひとくそあふくひよしのやいのらん神ませて

弘安日吉一品経中

正三位能清卿

ふくのはやあふきのつゆあふくや神は日吉のゆふかけて

通基卿

あまくたる日よしの神のしるしをやひとつのすきのこころ（かつらん）

さしてなほひよしのみやけのかりのやとりにしめしこすゑ（うつらん）

左京大夫顕朝卿

嘉元三年楚忽百首日吉七社中

従三位[illegible]卿

からさきの松のこすゑにやとる世のこころしるせしこそ神代の

からさきの松もふりぬ世をとこしへにかせて（のあと）

古事談神社
日吉客人宮者白山権現云々依或人夢想造小社所奉祝居也而慶命座主之時無指證拠者無詮小社也又可御座者可被示不思議云々件夜入座主之夢有社上許白雪一尺計積タリケリ六月云々其後霊験掲焉云々

[illegible]人家

みかつきの宮ゐまゐりし雪にふりそあとをたれてもまつそ世（たふられ）

親王[illegible]

現存

みつからまうてしものの花をふくのかみあらはせてひさしきうくへき

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4
ガラス使用

この寺は日吉の西社に千年の樹をうへくゝ
の寺さんしくはすゝめて侍りけるに　寄樹
まつらんよゝとさかへめつらんと

建保四年日吉哥合社頭松風

後九条内大臣

神さかきときのゆふしてうちなびきかつらぬちよの松風ぞふく

三社寺中ひろき

前中納言定家

あはれひをおもふさのみそきはいのりてもいかならひさきさきの
ひろの
まつ玉のみをとめむやみおもひこそひろみつ神のひくきくれ
こゝろは平野の神の山寺とあん

白山ちくしよ　ひたちの神

権僧正公朝

とりもてのひたちの神のちかひまて人のつさをもしまもるらん

鹿嶋なしまの寺を筑波神を国の名をそへてよまれけりさて不審

仁安二年二月清輔朝臣家哥合新神祇

ひとことぬし一云
山桜

清輔朝臣

あふさかやなかくもちまつのりそひとことぬしよねきさそうけつる

この寺は葛城ちゑんまへとやへもちさうとうつき
の神をいのりまゐらせたまへとゆへおりてこそまおりおろ
まつれは椅とそやあはれなりしとき
　とイ

新神祇

素蓮法師

死イ
吾林坂
津ましあさきをひとことぬしはいのりしんをけぬつゝさいはひそあらん

廣瀬大和

諸神里 近江
千載

現存六

衣笠内大臣

所集 ひろせの神 廣瀬 山城

こむけするひろせの神の志しあらはこひのなみこのふせ あせなん

永仁大嘗会 もろかみ

前中納言後宇多

あきてゝ日かけのこすきかけよくもかしこまりれやその もろかみ

家集 すきのを 出雲

和泉式ア

すきのをの尺とをいのるともなりまこしてそこまし なみのやへかき

富蓮法師

屋ゝくるひかりやそこにたちぬるんきゝまけいかみきの うそこき

この命は出雲の大社に詣てゝ侍られはあき

こもこなひく山の中まてかこそきの尺と

かるなんこのよ此とこもなりしさりなるかし

たゞ名ゝと云く

家集月命中 すくなみの神 出雲

後粧殺し

月みまはすくなみ神そこゝめしきふまは正代つくりさりきは ちまし家

住吉社にあてまつりなる百首

慈法和尚

ちりのなみちりしむしろまのそこてやまゝ住吉の神

いしかはの津かのむりしとこねしとあはれとやはし住吉の神

志かの代にひさしくふりへ住吉の社にまちさりしすくさのむ

三社命

前中納言定家卿

清遠なくて色相すゝのえまこむけ草ひきすてられ屋のくち 兼成

建保三年内大臣家百首神祇

大藏卿家

住吉の神代乃松のあれのまもかりてもひさしうつの国りき

住吉社ふく虹月　両行三人

かくれのゆきあらぬさよりきり月のさしてみそきの 家よをくらん

住吉社百首作奇　兼清和尚

みそれゆくよにそたのめもろしをもう国まるは住吉の 神

不審

同社三十首　従二位家隆

さそちつくよつの社のくりへまほ夜の清るまくそさかん

後拾遺神祇

天王寺まく　前太政大臣

白石の玉出の水とまくこそてせすふちき

ひの末ハまくしし

実房此玉出同しるまつや可考

兼安二年廣田社奇合建懐判者後如石

屋内法師

すゝのえまむこのうれ立そひてふくひ神のめろこをそう

行家卿家よませ分り住吉奇合社頭説

清雪関平

新拾遺神祇

天かくめ毎まてのきしよやうちりのすゑはちよ 寄しし

○社　付文

いすゝの文

寛治元年十首奇合社頭説

大納言雅忠卿

雅

ちりやかるいすゝのこやのまはらしてゝりしぬ世代をてゝらす とそこさく

建保三年名所百首 いせとのこや 兼陽門侍

月新色なしすやもとまんすくらゝ河いせとの文のせくのかゝ こちら

寛治元年十首 帝合 社頂税 いせのこや 伊勢

花山院門大臣

続古神祇 皇太后宮大夫師継

神かせやいすゝのうへのいそのこやとこゝの浪のこゝ 秀俊 のとけさ

千五百歳 帝合 とゝうけのこや 伊勢 西門内大臣

そのかゝやいのりし事ハとゝうけのしるしそ君かめくこゝ かる

久安百首 そやしろ 上西門院兵衛

うなひこりかきのよいなしをやしろもしかしてとゝなるいこのまん

文治二年百首 神祇 かきのやしろ 前中納言実家

さくことにこのひんのすゝ西さりかものやしろのこゝもしの こゝ

鄭不和 かりの社頃 大和 いせのこや 伊勢 よりこ人 不和

万十一 あさしとかやかりのやしろのいそひつきいてゝまてやしろかれ つまそも

家集 いせの文 伊勢 西行三人

この書いたかをしまてこゝそなんん代代の文ますせて

同 くつまの文 月防 元輔

流布本家集ナシ

ちりやかりかつきの文のひかこ松ないをさむそてはくまつ らん

建保三年内裏歌百首 賀茂 さすの文 山城

兼藤和尚

周防佐婆郡 勝間 加都 万葉

壺志郡 宕野 多木乃
度會郡 瀧原宮 大日次新掌
多伎原神社

名かしぬへいうきこまの人のいつりをさしすの家にまうせて
そこう
家集 さきのこや 伊勢
西行二人
なこしとうの花のしつえのいたれさきの交りやをとしよせむ
らん
六帖部 はしやしろ
信実朝臣
新六二
屋の屋乃木の下かけの津し社されるはさりのぬさたむく
らん
中務卿親王家六合社 つきしろ 接待正公朝
下勾神功皇后紀ニ
君のふりさけ中の森のつきし社こやそなすこきかよ
いつる神
建保元年十首の合 なくの社 慈鎮和尚
君代を万代とこそかくふらめなくの社のこつのひしりは
百首の命
同

現存六ニヤ新六ニハナシ

二なきやとせのはりを西にもりとてなくまに神ハおとゝ紙れ
ハ
六帖部社
家長門大臣
屋をとめのかりて海すくれとろくまなくのやしろハ交叶
せりとそ
義元三年七尾社命合社以横花
なくなくの社
前中納言定家
さしけして美やゆくらしちりやかりなくの交のむれゆふ
家集 なくのをやしろ 土和
俊頼朝臣
永久四年百首
いのりことなくのをやしろころくとことなくせよくらしろ
文永六年毎日一首中神祇命神寅
言のあそせしかし
なくひのこや 伊勢
民部卿家

度會郡
瀧原宮
多伎原神社

尾張愛智郡
針名神社
伊勢朝明郡
井手神社
尾張中嶋郡
針熊神社
同
丹羽郡
針綱神社
井出神社

新撰

雄渾尊意光同とちく
はる雅院の詩の時幸安山三首中
くまのくしや 紀伊
前中納言宝歌
ちやかゝる海のく文のなきのなかれかけてぬちまのさめしふそひく
寛治二年百首歌の社説 民部卿 ふくたの社
あきつ海ゝまの社のあきしかくて西のりえくてむ代のひさしき
神祇命 けひのくしや 郡家
行遍
越前敦賀郡 氣比神社七座 並名神大 敦神社
山城さかゝきをとこひまのうしをきて神さひまかりけひのかゝ文
百首の命 かゝの社 大和
明徳院の御製
いくしせのかけとる神也ちきからんかゝの風しのすきの下風
三百六十首中
好忠
ひかりかゝのやしろの神やつこもるきにかりとしるくめやそ
源河院の時百首
大納言師頼
新拾春上 堀百
いそのかゝかゝのやしろ中の春くれはかすまこゝかゝひくさ まとの山
三十六人命合
經正朝臣
あまとかゝかゝの社のもとちかや秋はかりするあきのおもかき
久安百首
郁芳門院安藝
さこされのかゝのやしろの時なみかきの山をさしてなくなり
家集
小弁
いそのよりかゝの社代すきぬまはよしあくしまゆきやさよ

とのゐにはあまた人やあるはなんしろしめすへきとゝ
まもなくていふとうちてもあめともと
ふえふくとの社 未
家集
前太政大臣 俊光
あさくまの社の神はいとゝしくあさひ思ひやすらかにさかえん
文永六年毎日一首中 あさくまのこや 伊勢
民部卿為家
あさくまの宮ゐのもとのまつかえもとのまゝなるこそのかけ
神祇歌中
慈鎮和尚 神主尚長
あさくまの神やいかにの揺とられたるかのかけをはらね
あそのみや 阿蘇
後京極摂政

肥後阿蘇郡 健磐龍命神社 名神大
阿蘇比咩神社
いつはりをたゝすのもりもよしなやなあそのみやしろの（？）つれなき
このさとは宮仕へしてくらしなるは河あその社は
まもりてし宮の流とさかえてさかえむ
家集神祇歌中 あさひのこや 伊勢
後京極摂政太政大臣
上野勢多郡 赤城神社 名神大
玉神祇
あかきの社
神風やあさ日の宮のみやうつしかけのとかなる世にもあるかな
かきつけのせゝのあかきの社やましいまにてあさなゝに
西三條右大臣
新続古今神祇
神祇歌の中より 中原師光朝臣
よろつのあそこ
新撰六帖
いにしへのむかしのまつもあかきの文をはかなくそみなからとまりける
家集 さらとの文
常陸
光俊朝臣
あさまつりやさかりのみやのかうこやのあやのこかれてさやからん

朝明郡 櫻神社

さくらの宮 伴熟

百首所

皇太后宮大夫人俊成

名をも世へさくらの宮にいのりこんむをちくさぬ神風をが

神祇所中 きふねのこや 山脇

加茂前如物

愛宕郡 貴布祢神社 名神大月次新嘗

思ふ 思ふ身はきふねの宮にまゐせさりしつめは神の名こそ立なめ

文治二年中 布祢社所合

法橋弘昭

九九 奈良花林院哥合 虚 読人不知

あしたつ 三つのひ たつ 雲ふ 三ふ木 引男のかうひちもなし

三つ かきのかけふそこゆるきふねの河ひさしくすめる神のんは

永久四年百首 三ふの社 太和

源兼昌

はしはつくそ なるへくるあしやきはこの社のしるしろくん

百首所

皇太后宮大夫人俊成

新後撰神祇

神中抄四云 童蒙抄云 江中納言集云 志ふつ のこてらの陳とうきて ほさそやな云こ

中略 都督の時 志ふつちなとのうたへ あるとき彼寺の陳状に よすれ しるてすかとすれ きこゆれ

貫之集 河やしろ志のまをりしへ ほすそ衣 いつるほせくるなめるひさしん

花所中 志めのこや 末田

慈木田延孝

神拾遺神祇

武庫郡 廣田神社 名神大月次 相嘗新嘗

たまこ所

神もさそあらはこうらん 揃ちる志めの宮をりあさこさ しめすか

廣田社二首所合社 ひろこの社 廣田 桜津

石田法師

さかれとり山この山にさしくて風ふりも志ふく雪ふりは

三帳記もろやろ

民部内藤

わちこ
むそぢあまりくもゐにみちゝるかすみの杜よそのかくれてあとは　これなき

山葉 すゝき社 大和　鎌倉右大臣

いはつゝる三幡のみかりそすゝき社すゝきみしのさはしらぬ

○釋教

[illegible]　僧都源信

古来斉
さとりえて心ひとつを日まあひぬれは禅あくまえぬつこの あやかさ

三界唯一心　心海上人

すゝしうるわれのすゑはかはれとも心ひとつの法のこゝろ よく

後拾釋教
同則 伊勢輔
ちゝ花をしまたと
まれ世中ハ人のほ
めすのうやハきく

續拾釋教
同心を　前権僧正宗性

いろもかも心のわくにうつ（うち　ある）さ花をみしはおしむ花のいろそちりける

雲葉
心月輪の心を　證空法師

さとりゆくまことのうちにすむ月はいてゝいる山のはもなし

秋蔵の斉の説法さそりてよろこびに大日

権僧正公朝

日をちあまりまつの光をうけやすみ月のあかしまんとそ ある

菩提の三種菩提心論心（願イ）　西行上人

おもひある心のゝへこそやすらひしと白河の関

毎日一箇中戒を　民部卿為家

いまゝもりのよしみの生えてそ拾つく心のこもりなる すゝ

寿量品義経般師大般師　皇太后宮大夫俊成

とまつるハ生死のきしにとれすてゝ無脱の風ゆふなよそひ
法花経廿八品守 序品 悉捨王位
慈信和尚

のりのうちとしふまるれハすへらにのあとにまとそあさま
序品 廣為諸衆生生数世の号
皇太后文太人偽作

新古釋教 まさにへきかすもかさしに猶ぬイ
曼殊沙花梅檀香風 西行三人
はるしりるへくふとまぬ花なれハこすゑまりのてかゆる
方便品 諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世

いさそ志りのへまさくへきこらす 慈信和尚
同文 西行三人
あさのふくとしきこらし風なくハいてゝや風まんしの月
深イ 方便品 深着於五欲如猶イ 猶牛愛尾
皇太后文太人偽作

うゐのおのへの様こしことも如りへハりはしかてゝ
辟言 最喩品 如火宅
慈信和尚

西とひゆしうき世の中まもりゆりぬ
其中衆生悉是吾子 偽作

新和釈教

ゑんなしことまよはすけさやかに世中にあらはれ法のあかつきのやと

同文　　西行上人

ちとせふていのりける身のあはれにもあふみつくとそおもひしらるゝ

我等宗不聞佛之音　　寂蓮法師

うき世にはてつかはるゝかりのやとをしらてもぬけしかひのこゝろの

信解品以佛道聲　　慈鎮

ほとけのみちをつたふるはなのこゑきこえてそのけしきやあるらん

無上寶聚不求自得　　俊成女

海よりもふかきことをそ月みれはしらぬにぬるゝや袖のうへ

是時窮子聞父此言即大歡喜得未曾有

西行上人

よしのやまかれえたにさくはなのいろさえてゆきのやまへといそくなりけり

菩薩宗不汝等所行是菩薩道　　慈鎮和尚

ちるのちのはなのちりをもあしたには花のしら露もやこそみえ

我觀一切普皆平等無有彼此愛憎之心　　俊成女

ちりさかはこのはもこのはのくさのまてそのうへにもへたてなきかな

同文　　西行上人

ひさかたのそらまつるにてもさくらにうつるたまかゆきとさん

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4
ガラス使用

千把虚空而以遊行亦未為難

信敬源人 信

玉釋教

[illegible]

移諸天人量於他土

慈鎮

[illegible]

挽婆娑於女成佛

同

[illegible]

髻中明珠

髻 髻吉

我獻宝珠世尊納受 イ

[illegible]

採菊及蒸蔬随時恭敬

偏如人

玉釋教

[illegible]

同 文

[illegible]

同

動持忍我不[illegible]力令[illegible]

受 イ

[illegible]

西行上人

[illegible]

何故憂色

慈鎮

[illegible]

安樂行品常在是好菱

同

[illegible]

深入禅定見十方佛

偏如人

[illegible]

同 文　　西行

[illegible]

涌出品　得成寂正覚惜無上法物

[illegible]

従地而涌出　　後拾遺

[illegible]

父少而子を　　兼輔

[illegible]

壽量品壽命無数劫　　同

[illegible]

[illegible]

同　文　　西行上人

[illegible]

現在滅尼滅　　後拾遺

[illegible]

常在霊鷲山　　嵯峨

[illegible]

分別功徳品　　兼輔和尚

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

今以付属汝等

あはれかしこのりのすゑはすゑとゝゆつりをさゝるしへ　俊成　かり

同　雅成　名

行すゑは世まひろめよとこゝひなてこゝひさつけしのりは　よの法

業王　容顔甚奇妙光明照十方

西行

花ばすゝろこしのあさ日の朝はやうてゐの月をこゝろ　かり

唐宣流布　慈鎮

三釋教

法のむちゝぬ風とこそなりなれしのさゝひの山ぬりの風

帝住安東世界　俊成　名

たのしき霧のいのちのさゆるとはたゝしのさゝしきゝ　なり

妙音　及　難処皆能救済

新結古釋教

あらさうこきひしきゝの中なれとあへなるこゝ　のり集　ハてさり　かり

正使和合百千万月其面貞端正

西行

しらんとやかはけはすゝしの地をあるよの月をなとつゝるゝ　りイ

八万四千　宣夷蓮花　慈鎮

もしのゝあまるこゝちのひしをはとろきなりしるへそ　なき

薬門　施母畏名　同

おそれなきをはみちひひしをうてしまうれはしてくへ　しらるれ

濱梅おしてるといひて
あのことせしは後な
ほう袖中おさし喜撰
式ホを引て論せり
此奇はむあとして
よめるを

弘哲云深如海歴劫不思議 俊如 白

ちらひかりんのやうてうこうなれハんとまとにをまつらひも
すし

同文 西行

としてるやふかたちらひのあれあまにひかまんとのこのりしき
不審

陀羅尼那 乃至夢中亦復莫惱

夢のうちまさしうさとりのあさうれハくるしきとき
同 俊如 白

同文

うつまはさしにをいかにぬる玉のゆめの中にもとるれやハ
すり

羅刹女等 慈信

十のあはのりれむしうに申しよりうにまつしきいとう
とのれ

嚴王品 願母放我等出家作沙門

としらひをこちひんそやたらちめにあしいと夜のすゑそ
同 らまつしき

又如一眼之亀値浮木孔 西行

おなしくはうましかしましあまれ河のりそろひしうさまなり
せハ

同 俊如

まをやこの浮木にあへるかめるむとうふれたものりハそぬ
と

同 雅慶 白

はちまいりあめまのわりて出はいとしあはなりにをさらちみ
のこめ

勾殺那 如就四法 慈信

法のあをわらけのこなまつてまとて四のくにしすひかれ
うる

かたけるれのりもあらねいかけるれ又のやうもたれすや
あらまし
君かくしむの仏代はくつまたまく仏蓋すまとて
康資王母集
瞻二地上人
新拾釋教
ぼしへのはるのをやしのこゑきかと物ひとくこそあらねえ
康資王母集
新拾
西行上人
花咲しはるのをやしのそのかゝはしはしのこゑ
大法叔壯十文殿奇合
慈法
しらのこゑ此波ふかけをもやとれかましのこゑ山のこゑ月
四季百首四奇
同
うれしくも卯月の七日ゆる日やこのよに仏むかしまさ面ひ
遠家 舎利 報イ 謙宮中学法 乗建
ましのこゑなりをあとのしるへかてゆきふこゑかりの庄人
建保三年内大臣家百首 釋迦
後二條家隆卿
ひとくしすくしも月色さやかふくらき世をてらしさのこゑ
久安百首一道無為一家仏性
前兼仏蔵也
しるくも四の車をすくめすいのりをつれさるへやあらし
法花經妙莊嚴王品
左京大夫敬愉
すへらきのこゑきをいてゝみさり世いとも日色世まいはるつと
さらまし

紀貫之朝臣

うちわたすをちこちびとにしらせばやふるさとはなはさかりなりと

寛平御時后宮歌合に

素性法師

見てのみや人に語らむさくら花手ごとに折りて家づとにせむ

同二井

僧正遍昭

ふきまよふ花のしたかぜ風をいたみ井辻巻
たえてそのかをしる人のなき

同

春宮亮藤原清経朝臣

ふるさとの花のにほひはかはらねどうつろふものは人の心か

同

紀貫之

ひさかたの光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ

同

素性法師

見てのみや人に語らむさくら花手ごとに折りて家づとにせむ

同

僧正遍昭

あふことをいとかくまでもへだてけむ心ぞ人の心なりける

同

在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは

同

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

同

紀貫之

ひさかたの光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ

法皇の御製に

藤原敏行朝臣

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人めよくらむ

同

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

同

紀貫之

あかずして別れし人のかずよりは涙の川ぞ瀬をまさりける

同

素性法師

今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな

同

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

同

在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは

同

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

法皇の御製に

藤原敏行朝臣

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人めよくらむ

同

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

同

紀貫之

あかずして別れし人のかずよりは涙の川ぞ瀬をまさりける

同

素性法師

今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな

同

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

吉野の山にこもりて侍りけるに

二条后

もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

花山院

花さそふ嵐の庭の雪ならで西の山とまるものは

百首の中

権僧正永縁

ちるさくらあらしのなかをくぐりきて雲の上とも見えぬ雲の上

百首の中

殿富門院大輔

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4
ガラス使用

巻廿九 榕已出

けさこれはれたけのあれつひむ也いつれるゝ君のひかれ 木

六作郎 喜三月春

しきこつひたけのたるこのたるすきも西ことの君まいつさう めやハ

大榕

家集 偏和

もとひかましさうふのりの此なれハひかりさはまうすぬ

此所ハ義人いふとにかゝりなくとしたり

かゝれ見つけてもとひかとさくてこれハそれ

かさくすいぐのこ海のもとにむすひつけて

随 来

はかりしかりとたこ

百首所 八条院高倉

ふく風や七重寒樹まかふふんふすましきこのタヘハれ

尋 成尋法師入唐之時 尋 成尋法師母

がのきしまほすくこそハ行てこめんまかるふのりの此いかさ

同 うらめしくこきたかまきぬかうさ 同 毎日のりのいかさとこのこ

家集 尺蓋所 殷富門院大輔

あつきのたちにのうてなつらくよしこ海さうへいとたけ

同 ちりるすき海りのさひらまさくむハをくまぬかけのいろ

同 六条院高倉

これたきまとひのやまちくされて六の君まやいまかへる

此所ハすきにかん世のつこのかともをしたり

南無の字につきて南にはなし西にありといふんふくよまれたるの李長者の弄巖合論を下にあるなや

[illegible]

久安百首　季通朝臣

西方ハあらさ仏なれはいとりなりやるもとくなる

同　前大納言隆季

[illegible]

補陀落山　お大僧正隆弁

派あらさみるこのうこのくるれ[illegible]

久安百首　花山院左右衛門大臣

[illegible]

毎日一首中　如意輪　民部大輔

[illegible]

同　弁中

観音の大悲大悲そむかしへさ八葉のたすのひしに

同　年毎日一首中

世のうさ絶りすれとうさもをのつくてまつる玉のとりしてすな

文永四年毎日一首中　弟光を

志川[illegible]

同　八年毎日一首中　十種法書

と日いるくそこの光もしるれ[illegible]

蓮長五年毎日一首中　自法

今ゆくさ　いさなのあまとみそいろはゆうさはとろふ西と
地獄乃絵代にてとゝ名ゆる　西行
このこみしはまきれたるにのかれて　しりとのひしとまま
はゝ人はしくのおちれそさまかとのつるさまとまれて
ひとつ男とあまりこまれのれきりてかむりまるはそうすしかる
何ゆりは吾ぬく吾こそかなしかれしかしとこと　いたしこ
ころさかむしの中まおとて女もゆるあれ
なへてなきころさかむしのつるしはよりのおもひのむしひ
天王ましまうて給附百首四命
慈法和尚

当世風令教礼救世親世者かゝほちきりはあしとそ世ふ
清のうへまのうゆりまちしさらの雲よりかまふあとそ
般若（風雅殿）　臺まおさめとさてし法花経もゆめとれ（ようれ）
ぬりのみちやさそおもりけまろこ山さの霞のあまれ衣
なふはりこのりのなそのひしけそあてうろふまこそ霞は
極楽とこの津の国とあれ人あまひきかとあけあり世て
東漸のこれりのかしの持面役はしのうこよりきこる人れ
十あまり七のちうひせし人はあとしこしこよ我みうよしとか
まり老子めりの八町のうちとさにうち地をうぬるいるまさ
りり寺の浦あまつりのあそひそあさにあらう西とあれ

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用

くるしきとるけき我うけハ我ん又のよくにあひこちらなせ
念仏の前　民アハ為家
何ゝ事を思ふ思ひもちりうきいのちのこゝろにこのこてそふる
西行上人
しきせいさめぬるへのゆるれともちれの池になるあるあるを
此前ハ地獄乃絵ゝり阿弥陀の光報にまのせ
て重業障の地獄をしらしハ地獄を照し給ふ
よりて地獄乃かるへの湯清涼の池になりて蓮
のひらきぬる所ハきあらはさる我みそくへ
見るとこそ

雲花供金樂
いけのうへにまたちれのいくたしきみそく浪ゆる独代風のさかり
十級百首十地現の池　常中納言宣家
すゝ所きの池のふもとあらわれくこゝの岩に浪そよ也
極楽六時讃代　皇太后宮大夫俊成
新続古釈教
ほのかなるちものあるこのふえ我のもきけハ仏のこのりかなり
此前ハ震旦　時朔イ　定より出住幣ゝり
天の樂を受くく
物まゝさきに花代れ花代れ花にしく庭に出て
此前ハ黄金瑞瑞の庭に出てくへたりし

ありかたき池のうへなるこの
中宮の曉到る浪のあと
歌曉まで月風の香隣家を
都名所
続古今雑歌
雲葉
教長卿
なき跡ぞとりをつたへて
旅宿へはとめてこそ
月ごろかくれゐのうへなる
天喜四年

後冷泉院御時
上東門院
中宮
御前の花
盛に
植られ
侍けるを
人々
見侍て
歌よみ
侍ける
ついでに
読人不知

続詞花雑歌
玉葉雑歌
ちりのそん

中宮
御前の花
盛に
植られ
侍けるを
人々
見侍て
歌よみ
侍ける
ついでに
読人不知

玉葉雑歌の内の上
寺と注す

山の人念仏の堂あり吾妻なる如来を安置志
さてまつりて律僧と凡俗といへれ如く
念仏ゆへさと思ひつゝひかりに律僧の姿
に黒衣の僧よりて志めしかるとなく

風
此哥ハ善光寺の如来の御哥とれん

風和教
行かまてこゝろ心とつけこれ人にいけ成つゝとかて
いそけ人こゝろのこゝろのかよ女よ
此二首ハ吾妻なるの如来の御哥とるん

この法哥ハつきて聖徳太子の読給へるとれん

○寺

伊呂波 四十七首

第四 納言定家

まへのこゝろ
ものひとさも枯ちしいかりもなくして

家集月明なる夜

西行二人

ひるとみる月にあつる代志ましやとき代つゝひのことなり
世八

橘本新作百首

なり九条門大臣

さうさそしあとまへくつなかさらくのこゝろのきしまのうら
理本

加茂社百首御哥

慈鎮和尚

いましへの三のさうそ志のさるしナ又大寺のあと代こうみて
同

これやさいなる程の山ますむ心閑伽振鈴のクメ蓄の聲
同

○

後鳥

永久四年百首寺

ぜしめなきはこのはりのなすし代ぬうのこゝろくとき
つゝ

春原七社

濱按 ガガズ 宗を心得 タカヒシニヤ

うちよするおとこそまさる山の桜花とのこゆきみやのそらにそまた
此寺ハ花山院花山寺にあそひ給ける時に
○よみて此寺におくらせ給へるとなん
六条院　信実
私云二
ふるき寺のある所をすきのこのもとにふたつはしらさともなからそ
寺
後日云
あけくれのそらにかよふも寺もはるかなるねこさぬ歌の絵によるとなん
衣笠内大臣
後京極摂政
京極家調詳　伊勢
難波なるなこの橋もつくるなり今はわか身を何にたとへん
峯の入の寺のかねもおそすくさにとすく山の木のかねかひひくそはにひくかな
古寺月
同
同
ちかひたるのきの風はかりさしてこの世の秋をまちぬ月をみすらん
文永六年毎日一首中　為家
小倉山ともしられぬとつくりかりもなるの入あひのこゑ
永仁元年九月十首古寺暮秋
左近大将内大臣
くれそめつ秋もふかきにかへる山かけのふるみりあひのこゑ
同
大納言為泰
秋もくれとしもくれぬとつくるなるのきのいりあひのこゑ
嘉元二年春日親王家歌合百首寺山暮
参議為相卿

すとなるゝ山路志つけき枝なくに枕のこきやゆめあらふ見

山ち行　同

山ふかき寺のそとものなくひしや世のうきふしにあらぬ行

山ち為　同

はらはりの原のゆふそのこゝろなくせこまはしまうちりの知家

家孫四年百首　山ち　内家

あかすくくかハ志きこまおちそひて人者もをぬ世の山ち

遠き四年毎日一首中　同

山ちのあけ行かゝまうちそへて枕の夏をあらふこきつと

六条歌　西三位知家

おきこつむ時のまゝをなく山寺にわきて一夜あらなくなる

家集　西行

入あひのどとのこなくす山ちにふこよひこ志もあられ如かり

正治二年百首仙奇　俗名拝隠

雲イ

雰ぬりしそこと也志しぬ山ちにまたうかれひくまいのをと

小

小首奇　しこのの山ち　内家

風雅中

あかこなの花のかれ葉もうち志めり鶴きりふかしこのの山ち

光明家ち入る拝殿家百首石ち紅葉

定家

そはたつ枕におつかほのをとも紅葉をいつかみにのの山ち

未二　とえ　新六
いさしらすけのはさへかくみえしと九重まり花のちりしく　こゝろせ

題不知　よみ人不知

九十六
うちむれの春乃あらしやよしの山ねにしかかれるはなのありあけ　つらん

文永八年毎日一首中　花の山る　民部卿為家

さらにまたてのかりやとらそひうさいらのりのなきのゆる

建保元年八月十五夜月十首哥合右名月

皇太后宮大夫俊成

玉秋下
みよしのゝ山乃ありあるすゑのいさりのをはの月

題不知　山家　かきかへん

源重房

新拾く
ちとせふるまつすゑのさゝなみはのりのやさしへまたく

殷富門院大輔

法のためめくりあふ世のしるしにやむかしの人のかけもみえけん

此歌はある人にいさなひて大井河紅葉の次法

輪へ参りけるに彼人のもとにまかりてかくれたる

とりそのりの車をけつりされけるよみあると云々

建長四年毎日一首中　法橋

右　為家

ふりみの座定え義にすめる鷲の山のちの月

弘長元年四月八日　百首　さんのゐる

月のうさきみちをるのかのみのそれのまたうさ世の名やさかえん

洞院按政家百首税 法勝寺 山條 家長 朝臣

美濃にまかりのりなりて人々にしらせしめさせて遥

又嘉元年毎日一首中 山條 内家臣

山様花のさかりにさつきてくもゐ寺の名所につかす

深夜政房 源仲正

雲ゐるかくりひさけ如へるかりかりにこそよはなり

郡風和 兼作 子兼 よみれ

或ゆ大宝八宝葉

すむ月をこゝろの見かなにまかせれはくもゐるものこゝ

雲居寺所合 花園左大臣家山大臣 かり

文保 雲ゐ寺かすこゝかさとく美風にこそはくかりなる美郷

東山めて月あかさ夜 惠業法師

久しくはてにまとろかりぬよかり雲のみかてゐるにやとりて

建保二年内大臣家百首 阿源亜

家隆臣

しらぬよのあかさかふりもたれぬんこゝあるものをいつ光

二夜百首 仏寺 又首中 隆源按政

あかさ夜にあさ日まつさのしらしてこゝのくもゐの月

あらはさ 同 かつ 同 ゆのとしこそ 同 ゐるれ 同 さひ 同 きしのしる

ちもまふ 同 人のしてしられかるかゝ 同 ちのもくの山

寺 よこ人 風和

あつまへと思ひたつ田の山をこえ いさしらなみにあそふまては
西大寺 西の京にて 殷富門院大輔
さりともとかへしの御法のむかしそこのおもひやりしと
天王寺百首 ふみのてら 寂蓮
みつしほのむかしのこゝろのむかしをたつぬる人のこころとめつゝ
ゆくへしらぬのちの世をふかくそたのむまことの花のちる世なりけり
あはれとやおもふらんあまのかはらのなみのあとたえぬ
補方朗 昂是居場
うつそみのなかのちきりをむすふる額のめくりてしつくとこそ けれ
康元二年毎日一首中 天王寺西門 民部卿為家

世をすつるみちのひかりの入日こそ あかぬもすくはるゝれ
二見百首 御百首中 後京極摂政
難波江やあしまのおとにふかきそふれぬ月日のつもりをそなき里そ
寺 雲林院 よみ人不知
まちわひのかなしさにゆかたのみみえまくほしとおもふへし つらに
最勝四天王院寺 西行上人
されはやこゝろの雲のうへにしかるへきめくりやすめん
くるゝまてかれ寺にたてゝかゆかしきかな 雲林院
さくらさくあかれなるかな [illegible]
五十首歌 寺名花 後鳥羽院宮内卿

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4　　ガラス使用

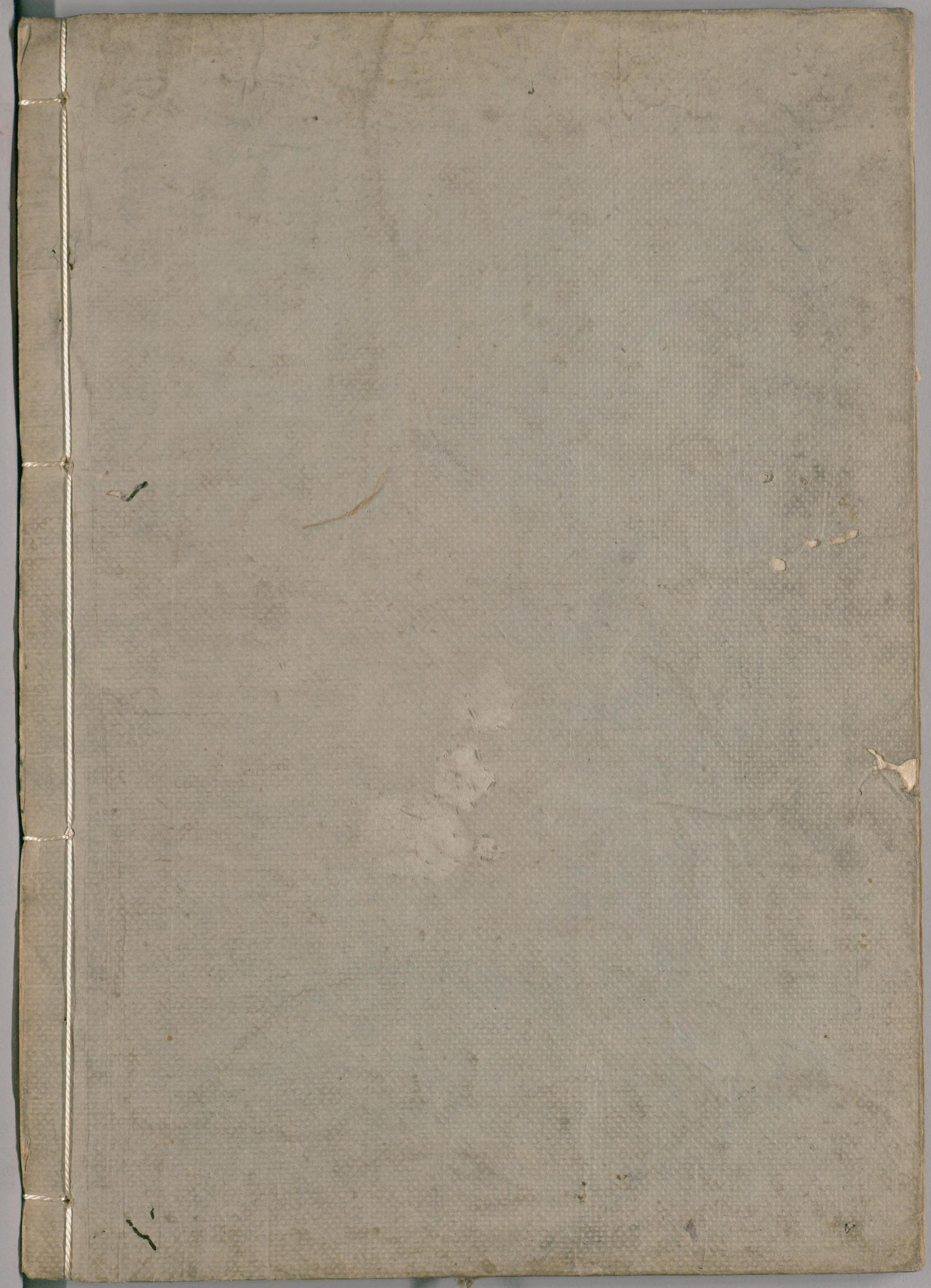
五百七十六首
長哥一首

837
36
4

白石舎蔵

国立国会図書館　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』 請求記号 837-4

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『夫木和歌抄 36巻目録1巻』　請求記号 837-4

ガラス使用